

あだな

○目標となる資質・能力

道徳性、思いやり・他者理解

○指導のねらい

いじめを傍観せず、被害者の気持ちになって考えることができる態度を育成する

○準備するもの

資料「あだな」

○教育課程、実施時期

道徳、特別活動

○留意点など

実施クラスに資料中の登場人物と同じ名前の児童がいる場合は人物名を変更する等の配慮を行うこと

展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	<p>1 あだ名について考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・呼ばれて嬉しい ・嫌な呼ばれ方をされると腹が立つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・呼ばれて嬉しかったあだ名や、嫌だったあだ名について発表させる
<p>あだなについて、相手の気持ちになって考えよう</p>		
展開 35分	<p>2 資料「あだな」の前半を読む</p> <p>3 資料「あだな」の後半を読む</p> <p>4 わたしは、どうすべきか考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケイコの気持ちを確認する ・ケイコの気持ちをクラスの人に伝える ・先生に言う ・先生に、クラス全員に伝えてもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ・前半を読み、ケイコさんは嬉しいあだ名だと思っていることを理解させる ・あだ名の由来と、周りの様子を理解させ、複雑に感じているわたしの心境を考えさせる ・「どうしよう」と悩む“わたし”の気持ちをおさえる ・何もしない、何もできないと考える児童には、このままだったらケイコさんはどうなるかを予想させる
まとめ 5分	<p>5 授業の感想を書く</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめを傍観せず、友だちのことを考える行動が大切であることを、自らの生活と照らし合わせながら振り返らせる

○「あだ名について考える」について

導入では、あだ名で呼ばれて嬉しかった気持ちや嫌だった気持ちを児童に考えさせる。勇気を持って嫌だった気持ちを表現してくれたことを十分に労うと同時に、聞いている児童に対しては発表者に体を向けさせるなど、気持ちを受けとめることができるような雰囲気づくりを行うようにする。

○資料「あだな」について

本資料では、前半と後半に教材を分けている。まず前半で、ケイコさんは嬉しいあだ名をつけてもらったと思っていることを理解させてから、後半を読むようにするが、児童の実態に合わせて、前半と後半を続けて提示してもよい。本資料は、あだ名の由来を知った“わたし”の立場から考えさせる教材であるが、児童の実態により加害者や被害者の立場から考えさせても良い。また、小学校の中学年用の資料としているが、あだ名が絡むいじめ等の問題は校種や学年を問わずに起こり得るので、教材に適宜加除修正を加えるなどして他学年等でも活用すると良い。

○「わたしは、どうすべきか考える」について

まずは、下記の内容を整理して伝え、“わたし”やケイコさんの状況を理解させる。

- ① ケイコさんは自分のあだ名がかわいいと思っており、気に入っている。
- ② 木のぼりが得意なケイコさんが猿みたいだということから、ケイコさんと同じクラスの人たちが「モンちゃん」と呼ぶようになった。
- ③ ②のあだ名の由来の事実をケイコさんは知らない。
- ④ あだ名の由来を知っている児童の中には、ケイコさんが「モンちゃん」と呼ばれていることに対して、指をさしながら笑っている児童もいる。

その後、“わたし”はどうすればよいかを児童を交えて協議する。例えば、そのまま様子を見るというような考えについては、導入でおさえた「嫌なあだ名で呼ばれたらどんな気持ちになるか」を思い出させて考えさせると良い。ケイコさんは嫌がっていないからいいのではないかという考えについては、陰で周りから笑われているあだ名だと後から知った時のケイコさんの気持ちを考えさせると良い。また、幼なじみで毎日一緒に帰るくらいの親友である“わたし”が実はあだ名の由来を知っていたのに黙っていたのだと、ケイコさんが後で知ったらどう思うのかを考えさせることも有効な手立てとなる。様々な角度から“わたし”とケイコさんの気持ちに触れさせながら協議ができるように工夫しながら展開する。

○「授業の感想を書く」について

自分の生活を振り返らせながら、友だちの気持ちを考えた行動が大切であることに気づかせるために、書いた感想を発表させる等、児童の心に響かせる工夫を行う。

あだな

(前半)

「ちがうクラスになったね。」

ケイコさんは、わたしのおさななじみの友だちだ。

「ざんねんだね。でもこれからもいっしょにかえろうね。」

「うん。」

家も近所のケイコさんとは、三年生まで同じクラスで、いつもいっしょに帰っていた。

「じゃあ、先に帰りの会が終わったら、おたがいむかえに行くことにしよう。」

「わかった。」

六月になり、わたしはケイコさんの教室の前で、帰りの会が終わるのを待っていた。

「じゃあね。モンちゃん。」

「モンちゃん。明日の体育がんばろうね。」

ケイコさんは、クラスの友だちから新しいあだなでよばれている。

「うん。がんばろうね。じゃあ明日。」

ケイコさんも、うれしそうに返事をしていた。

『モンちゃん』ってよばれているんだね。」

「そうなんだよ。『モンちゃん』ってかわいいよね。わたしも気に入っているんだ。」

「へー、よかったね。」

「わたしも『モンちゃん』ってよぼうかな。」

「いいよ。」

(後半)

次の日、いつものようにケイコさんの帰りの会が終わるのを待っていると、横にいたケンジさんが、

「ねえ、いつもいっしょに帰っているケイコさんんだけど、『モンちゃん』ってよばれているらしいね。」

「うん。かわいいよね。」

「じつは、そのあだななんだけど……」

「どうしたの？」

『モンちゃん』っていうのは、ケイコさんが木のぼりがとくいで、さるみたいだから『モンちゃん』ってよばれているらしいんだ。」

「え？さるって英語でモンキーだから、モンちゃん？」

「うん……」

ケイコさんは、『モンちゃん』ってよばれてうれしそうだった。しかし、なぜ『モンちゃん』とよばれているかケイコさんは知らない。(ケイコさんが、このことを知ったらどう思うだろう……)

「じゃあね、モンちゃん。」

「モンちゃん、体育の時間かっこよかったよ。」

「ありがとう。」

わたしは、ケイコさんと同じクラスの人たちが、ケイコさんを指さしながら笑っているすがたを見てしまった。

「おまたせ。じゃあ、帰ろうか。」

「うん……」

(ケイコさんは、まだ、なぜ『モンちゃん』というあだながついたのか知らない。どうしよう……)